清流

題字：芳野　充

令和4年2月28日
第62号

発行所　加来不動産㈱
発行者　加来　寛
北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに
静かに
清流のように

責任感をもち、親が襟を正す

「人生は重き荷物を背負い、遠き道を行くがごとし」とは、かの有名な徳川家康の言葉です。その重き荷物とは、各人が背負う責任をいうのではないでしょうか。

家庭では、夫として父として家庭を守り、子どもを自立へと導いていくこと。経営者として、スタッフの生活を安定させ、生きがいをもたせること。不動産業界やＰＴＡ役員、町内会の役員として、今よりすこしでも体制を改善させること。外部組織の理事や監事として、期待されている結果をだす努力をおこなうことなど、さまざまな責務があります。

色々考えるとその重圧に押しつぶされそうになり、逃げだしたくなることもありますが、逆にそれがやりがいや成長にもつながっています。なかでも家庭での責務では、さいきんとくに感じることがあります。それは、子どもたちに思いやりを伝え、その手本となれる大人になること、です。「子どもは親の言うようにはしないが、親のするようにする」という言葉がありますが、本当にそうだと実感する瞬間が多々あります。

例えば、子どもがわたしたちの意見に対し、けわしい表情とつよい口調で反発することがあり、怒りを覚えることがあります。わたしの話を上の空で聞き何の返事もされず、寂しくざんねんな気持ちになることがあります。出された料理に感謝を述べるのではなく、自分の都合を押しつけ、母親（妻）に不快さを与えている場面があります。

わたしは、勉強ができなくても学歴がなくても、思いやりのある人に育ってほしいと願っています。なぜなら勉強ができ学歴があっても、自己中心的な考えを先行し、人や世の中に迷惑をかける人、思い込みがつよく頑固な人は結果として、人が寄りつかず、幸せを感じづらい人生になると理解しているからです。では、わたし自身はできているだろうか。外に向けた矢印を自分自身に向けてみると、子どもがしているようなことを妻にしている場面に気づきます。

品性豊かに生きるための「二十の徳目」の十九番目は、「責任感」です。「責任感」とは、自分が引き受けた任務を最後までやり遂げる覚悟、を言います。親は子どもに、何が正しくて何がまちがいなのか、あるいは、社会にでて幸せに生きるために必要なことを伝える責任があると思います。子どもが成長していく過程で、幸せを実感できるように、また社会の一員として、より良い社会を形成するために。そのためには責任感をもち、親であるわたしの襟を正し、子どもたちの手本となれる大人を目指します。

加来　寛